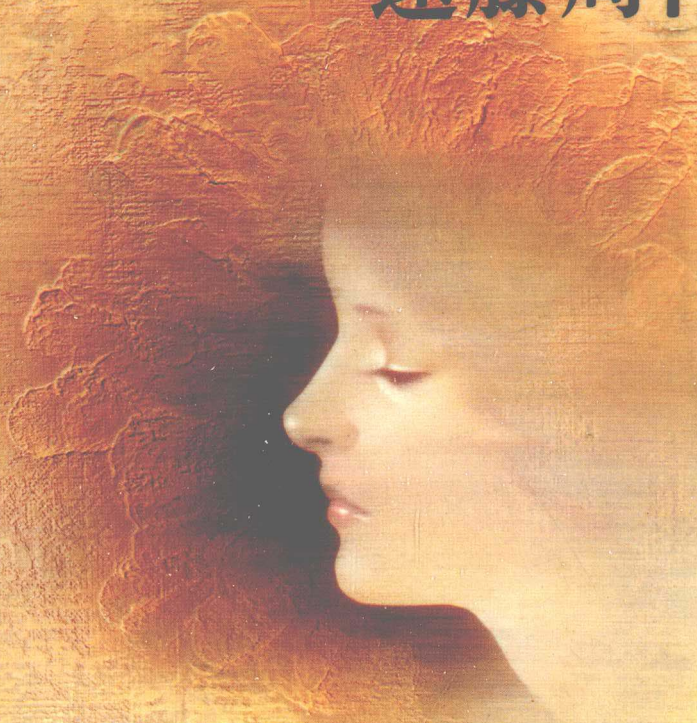


悪霊の午後

遠藤周作



夏の午後

江苏工业学院图书馆

藏书章

遠藤周作

悪霊の午後

昭和五十八年四月二十二日 第一刷発行

著者——遠藤周作

© Syusaku Endo 1983, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三―九四―二二一 振替東京八―五五〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——二二〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

暗黒の夜	過去	最初の火	序幕	接近	魔	心の変化	もう一つの線	寡婦	占い	まえがき
186	158	140	112	89	72	52	38	18	9	7

大団円	屋上	闇	慶子	斜面	プリズム	蜘蛛の糸	もう一歩	断崖	相似形	渦
381	364	342	322	305	286	268	249	234	220	195

裝面 中原備

悪霊の午後

まえがき

この小説は今まで私が書いたエンターテインメントとは非常に趣を異にしていると思う。新聞連載中も読者からその疑問を手紙にもらったことさえあった。

私はこの小説をユングの影の問題から刺激をうけて書いたことを率直に告白したい。我々の心の奥には世間でみせる我々の顔とは別の秘密の顔がある。それを当人さえ気づかぬこともある。その秘密の顔は無意識に抑圧された、ある意味で本当の顔だが、しかしそれを表面に出すと我々は社会的に生きていけない場合もある。ユングはそれを影といった。

「ジキル博士とハイド氏」の話は有名だが、しかしこれは人間誰にも存在する命題なのだ。この小説はある意味で私の「ジキル博士とハイド氏」である。

校正を見終って 遠藤周作

占　い

その日、A賞とN賞との選考会が築地の料亭であった。

選考委員の藤綱は会がひらかれる六時に着くよう主催の出版社がまわしてきた車でホテルを出た。このホテルの一室を彼はもう三年ほど前から仕事場として借りきっていたのである。

築地にむかう車は霧雨のふる銀座をゆっくり通過していく。色とりどりの傘をさした男女がまるで蟻の行列のように横断歩道をわたり尾張町の方角にすすんでいく。

(今日は荒れるだろうな)

と藤綱は窓に体をあずけて、ふと、そう思った。

文壇の新人賞のなかでも一番有名ながこのA賞とN賞とである。A賞は純文学にN賞は大衆文学に進む新人作家にそれぞれ与えられるが、受賞者は文壇から一人前の小説家とみなされるのでその競争は烈しい。選考する委員たちも真剣である。

A賞の候補作品七つのうち、藤綱は二つの小説が同水準であとはそれ以下とみた。

長年の経験で自分の考えは他の委員のところがわかないと思う。問題は残った二作品のどちらを高く採点するかで委員たちは二つにわかれるだろう。

(荒れるな)

そう考えて彼は自分といつも、そしておそらく今度も意見がくいちがう坂井という小説家の顔を思いうかべた。

会場の料亭につくともう新聞社やテレビの人たちが待機していた。受賞者の名はその夜のテレビのニュースでも流されるからである。

「藤綱さん」

彼が玄関に入ろうとすると、P新聞の親しい記者がそばに寄ってきて、

「今日は誰に決まりそうですか」

と笑いながらたずねた。

「国家の秘密」

と藤綱も笑いかえして答えた。

控え間に入るとA賞、N賞の選考委員たちの大半がもう集まっていて、テレビの角力をみていた。十分ほどたつて係がよびにきた。

「今日は選考がむつかしくなりそうだぞ」

と藤綱は部屋に向いながら前を歩く坂井に声をかけた。

「そうだな」

と坂井は重々しい表情でうなずいた。

それから三時間ちかく、予想通り、意見が二つにわかれ、おたがいゆずらなかつた。そして結局、坂井や藤綱にとって大先輩の羽島氏の裁定で二作品が同時受賞ということにきまつた。

(疲れた——)

やっと解放されると疲労をぐんと感じ、出版社の人に銀座で飲みませんかと誘われたが、「仕事があるので……」と藤綱は断つた。

本当は早くホテルに戻り、一人でバアで考えごとをしながら飲もうと思つたのである。

霧雨のなかをふたたび車でホテルに戻つた。

もう三年もここを使っているからフロントの係員とも顔なじみである。何も言わなくても彼の部屋の鍵を渡してくれた。部屋は二十六階である。

エレベーターをおり、がらんとした長い廊下を歩いて自室の扉をあけた。扉をあけると大きな窓から雨に煙つた東京が宝石箱のようにかがやいていた。

スタンドの光の下に机上の原稿用紙や参考文献の書物が雑多にならんでいる。

シャワールの栓をひねって熱いシャワーをあび下着やワイシャツをすっかり取り替え軽快な服装でまた部屋を出た。バアで一杯やるつもりだった。

バア「ピュリイデ」はこのホテルの一階の奥にあつて、そこからの憂いピアノが流れている。彼がピアノから少し離れた席に座ると、パーテンがすぐウィスキーの瓶を棚からとり出した。パーテンは藤綱の好みを昔から知っているのである。

いつもの習慣で彼はグラスの縁を唇につけてから酒をゆっくり口にふくんだ。そしてピアノの

音にあわせ、このところ書きなずんでいる自分の小説のことを考えた。

彼が小説のあるイメージや場面を考えるのは決して書齋やこのホテルの仕事場ではなかった。ながい経験で彼はそんな書齋や仕事場ではない着想がうかばないことを知っていた。むしろ、そうした着想は車や電車のなかやこんなパアで酒を飲んでいる時に不意に出てくるのだった。今日は酔いが次第に頭をしびらせても、行きづまったある場面を展開させるものを思いつかなかった。

ボーイがパアの奥にあるテレビをつけた。テレビではちょうどニュースでA賞、N賞の受賞者が決まったことをアナウンサーが知らせていた。今頃、受賞者たちは全身幸せにみちた気持で記者会見のある会場に赴いているだろう。

ニュースはスポーツ・ニュースに変わった。みるともなしに今日のセ・リーグの勝敗に眼をやっている、パアの入口から二人の中年の女性がはいってきた。

その一人の婦人が藤綱をふと見て、

「あら」

と足をとめ、

「令一さん」

藤綱という姓ではなく名をよんだ。

藤綱は顔をあげ、しばらく会わない従姉が微笑んでいるのに気づいて、

「やあ」

と手をあげた。

「どうしたの、こんな時間に……」

「このホテルで同窓会があったの」

と従姉はうなずいて、自分のつれを彼に紹介した。

「御存知でしょ。テレビや雑誌で占星術をやっていらっしやる浅利リノさん」

なるほど、そういえばその顔はどこかで見た記憶があった。

「藤綱です」

彼はたちあがって頭をさげ、

「御一緒にいかがです」

と儀礼的にさそった。しかし正直いえばひとりで飲もうと思っていた矢先に二人の相手に気をつかうのは億劫な気がした。特に彼は中年の女性が苦手だった。

だが従姉は嬉しそうに、

「ほんと？ お邪魔じゃないかしら？」

と言いながらも友だちとそのまま腰をおろしてしまった。

二人がカカオ・フィーズをとって、さきほどまで開かれていた同窓会の話をしているのを藤綱はしばらく聞くともしに聞いていた。

「ごめんなさい」

とやがて従姉は気がついてあやまった。

「わたくしたちばかりで勝手なおしゃべりをして……。何しろ何年ぶりかですものだから」
それから藤綱の気をひくように、

「ねえ、彼女に占ってもらったら？」

「占う？」

「そうよ、さっき、二、三人の方が簡単な占いをやってもらったの、とてもよく当たったのよ。ふしぎなくらい」

藤綱は苦笑した。彼は占いとか透視とかいう類のものはいっさい信じていなかった。

「およしなさいよ」

と浅利リノは従姉に反対した。

「御迷惑よ、そんなこと、おいやな人もいらっしやるんだから」

「嫌じゃありませんが……」

と藤綱は笑いながら首をふった。

「ただ、信じられないんです」

「今日、何か大切な会がありましたね」

と突然、浅利リノは言った。藤綱の一寸、小馬鹿にした態度に挑むような言いかただった。

「ええ、どうして、おわかりです」

と答えて藤綱はあたり前じゃないかと思った。A賞N賞の選考会のあったことはさっきテレビのニュースで報じられたばかりだ。この女はきつとあのニュースを見たにちがいない。

「それで……少しお疲れになって一人でホテルにお戻りでしたね」

「その通りです」

今度はやや、ふしぎだった。しかし彼がここで一人で飲んでいるのを見れば、そう推理するの
はむつかしくない筈だ。

そうか。占いとはたくみな推理なのだな、と藤綱は考え、面白いとおもった。

「今のが……あなたの占いですか」